

最優秀賞論文

マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』が描く 「古き良き南部」の名誉と調和

— スカーレットが愛したプランテーション社会 —

南 原 怜 奈

要 旨

マーガレット・ミッチェル (Margaret Mitchell) が10年の歳月をかけて執筆した『風と共に去りぬ』 (*Gone With The Wind*) は1936年に刊行されるやいなや、またたく間に40カ国語に翻訳され、1939年にはハリウッドにて映画化された。本作はプランターの娘として生まれたケイティ・スカーレット・オハラを主人公に、南北戦争期における南部プランテーションの繁栄と崩壊、それを取り巻く南部富裕層の人間関係を描いている。

この『風と共に去りぬ』では、南部プランテーション社会を語るうえで欠かせない「古き良き南部」という重要な概念がしばしば登場する。「古き良き南部」は保守的なジェンダー観を内包している。女性に対しては「サザン・ベル」という、「いつもやさしく、慈悲深く、寛大」 (第1巻 129-130) な、理想的な貴婦人の在り方を示す言葉が存在した。そのような社会の中でヒロイン、スカーレットは、保守的な南部女性としての在り方を否定する、革新的な生き様を作品内で見せる。彼女は、女性は家庭にとどまるべきという南部の伝統的概念を飛び越え、南北戦争敗戦後は女性起業家としての才能を開花させた。しかし、スカーレットの起業による自立はあくまで家族を貧困から守るためである。南部での女性の地位の低さに疑問を感じ、男性からの支配を抜け出そうと画策したわけではない。

また、敗戦後失われた南部社会を指して、南部プランターであったアシュリ・ウィルクスは、度々「古き良き南部」への郷愁を口にしている。「古き良き南部」への郷愁はアシュリのようなプランターの男性はもちろん、スカーレットら女性でさえ物語終盤で述べている。この保守的、封建的な価値観が、いかに南部人の心に根差しているかを読み取ることができる。

本稿の目的は、『風と共に去りぬ』が、「古き良き南部」の調和の維持に貢献する南部女性と、調和の基礎となっている名誉を守ろうとする農園主たちの、保守的な生き方を礼賛していることの証明である。第一章においては『風と共に去りぬ』と、史実のプランテーション家庭における女性ジェンダーについて論じる。第一節では『風と共に去りぬ』における「古き良き南部」の調和とは何かを考察していく。それは、紳士的な農園主、それを支える貞淑な「サザン・ベ

ル」という、保守的なジェンダーを有する人間同士が構成する同質社会を指していたことを明らかにしたい。第二節では、作中で描かれた理想の「サザン・ベル」、および史実の南部女性の描写を読みながら、彼女たちが南部で頂点に君臨する農園主にとって暮らしやすい「古き良き南部」の調和を維持するために奉仕する存在であったことを証明する。

第二章は農園主の名誉から見る男性ジェンダーについて論じる。第一節では『風と共に去りぬ』の農園主の男性の描写と、史実上の農園主に関する記録から、彼らが騎士道精神を尊びながら、同時に家父長として、奴隷主としてプランテーションに君臨する誇りと名誉を何よりも重んじる存在であったことを証明する。第二節では「古き良き南部」の調和の体現において、農園主の名誉が果たす役割について考察する。この名誉こそが「古き良き南部」の調和の基礎であり、農園主が名誉を保守することで家庭や南部社会の調和が生まれ、その調和を南部女性を守り続けるという、南部特有の社会構造を明らかにしたい。

本稿ではこれらの論述をもって、『風と共に去りぬ』が、史実上の南部社会にも存在した「古き良き南部」の調和と名誉を守る女性と男性の、保守的な生き様を肯定的に描いたことを論証する。

目次

序論

第一章 「古き良き南部」の調和を守る「サザン・ベル」

第一節 「古き良き南部」の調和とは

第二節 「サザン・ベル」の役割

第二章 「古き良き南部」の調和を生み出す農園主たちの名誉

第一節 農園主たちの名誉とは

第二節 農園主の名誉と「古き良き南部」の調和

結論

引用文献

参考文献

序論

マーガレット・ミッチェル (Margaret Mitchell) が10年の歳月をかけて執筆した『風と共に去りぬ』 (*Gone With The Wind*) は1936年に刊行されるやいなや、またたく間に40カ国語に翻訳され、1939年にはハリウッドにて映画化された。本作はプランターの娘として生まれたケイティ・スカーレット・オハラを主人公に、南北戦争期における南部プランテーションの繁栄と崩壊、それを取り巻く南部富裕層の人間関係を描いている。

この『風と共に去りぬ』では、南部プランテーション社会を語るうえで欠かせない「古き良き南部」という重要な概念がしばしば登場する。これは奴隷制プランテーションで財を成した白人富裕層が、男性農園主を頂点とした封建的社会の中でキリスト教的道徳を貴びながら、その富によって華やかな暮らしを送るといった、プランテーション制が存在していた時代の南部

の地域性を指す（高橋 291）。「農園主を頂点とした封建的社会」と明記した通り、「古き良き南部」の地域性は保守的なジェンダー観を有する。女性に対しては、「サザン・ベル」という、「いつもやさしく、慈悲深く、寛大」（第1巻 129-130）な、理想的な貴婦人の在り方を示す言葉が存在した。そのような社会の中でヒロイン、スカーレットは、保守的な南部女性としての在り方を否定する、革新的な生き様を作品内で見せる。彼女は、女性も家庭にとどまるべきという南部の伝統的概念を飛び越え、南北戦争敗戦後は女性起業家としての才能を開花させた。本作が出版された1936年は、世界恐慌により失業率が30%を超え、失職した夫に代わって家計を支えるため、女性の就業率が飛躍的に上昇した（秋元 88）。旧来の性別役割分担が崩壊し、誰もが新しい生き方を模索しなければならない時代であった。本作の翻訳者である鴻巣友季子はあとがきにて、スカーレットを伝統的なジェンダー観から抜け出す革新的な女性として描くことで、好景気に沸いた1920年代から恐慌の広まる1930年代へと変化する世界に、柔軟に対応する人間を肯定し、変化を受け入れられない保守社会やそれに対する郷愁を冷静に批判していると考察している（第5巻 536）。しかし、スカーレットの起業による自立はあくまで家族を貧困から守るためである。南部での女性の地位の低さに疑問を感じ、男性からの支配を抜け出そうと画策したわけではないことに注意しなければならない。

また、敗戦後失われた南部社会を指して、南部プランターであったアシュリー・ウィルクスは、度々「古き良き南部」への郷愁を口にしている。南部プランターは、大農園経営によって妻子を扶養する「良き養い手」（後藤 44）としての名誉を何より重んじた集団であり、南北戦争敗戦後、最も没落を実感していたと考えられる。さらに、「古き良き南部」への郷愁はプランターの男性はもちろん、スカーレットでさえ物語終盤で述べている。この保守的、封建的な価値観がいかに南部人の心に根差しているかを読み取ることができる。

本稿の目的は、『風と共に去りぬ』が「古き良き南部」の調和の維持に貢献する南部女性と、調和の基礎となっている名誉を守ろうとする農園主たちの、保守的な生き方を礼賛していることの証明である。第一章においては『風と共に去りぬ』と、史実のプランテーション家庭における女性ジェンダーについて論じる。第一節では『風と共に去りぬ』における「古き良き南部」の調和とは何かを考察していく。本作では全編において「似た者同士」を指す“like”、“alike”という語が頻発するが、鴻巣はこの事実を「当時〔南北戦争以前〕のアメリカ南部社会が同質社会で、同質傾向を好む社会」であったためと考察している（25-27）。このことから、この調和が紳士的な農園主、それを支える貞淑な「サザン・ベル」という、保守的なジェンダーを有する人間同士が構成する同質社会を指していたことを明らかにしたい。第二節では、作中で描かれた理想の「サザン・ベル」、および史実の南部女性の描写を読みながら、彼女たちが南部で頂点に君臨する農園主にとって暮らしやすい「古き良き南部」の調和を維持するために奉仕する存在であったことを証明する。

第二章は農園主の名誉から見る男性ジェンダーについて論じる。第一節では『風と共に去りぬ』の農園主の男性の描写と、史実上の農園主に関する記録から、彼らが騎士道精神を尊びながら、同時に家父長として、奴隷主としてプランテーションに君臨する誇りと名誉を何よりも重んじる存在であったことを証明する。第二節では「古き良き南部」の調和の体現において、

農園主の名誉が果たす役割について考察する。この名誉こそが「古き良き南部」の調和の基礎であり、農園主が名誉を保守することで家庭や南部社会の調和が生まれ、その調和を南部女性が守り続けるという、南部特有の社会構造を明らかにしたい。

本稿ではこれらの論述をもって、『風と共に去りぬ』が、史実上の南部社会にも存在した「古き良き南部」の調和と名誉を守る女性と男性の、保守的な生き様を肯定的に描いたことを論証する。

第一章 「古き良き南部」の調和を守る「サザン・ベル」

本章では「古き良き南部」の調和がどのようなものであったかを考察し、それが保守的な価値観を共有する上流階級がもたらす同族意識と安心感を指していたことを明らかにする。

そして作品内に登場する南部女性たちが、「サザン・ベル」として家庭、社会における「古き良き南部」流の調和の維持に貢献する存在であったことを証明したい。

第一節 「古き良き南部」の調和とは

第一節では『風と共に去りぬ』における「古き良き南部」の調和がどのようなものであったのかを考察する。はじめに「古き良き南部」が調和を保つには2つの条件が必要であり、それは共同体の構成員を全員「上流階級」かつ、保守的な価値観を共有する「似た者同士」に限定することであったことを論じる。南部人にとって「似た者同士」=同質性とは、合理性を無視した一種の正しさであったと言える。そして2つの条件を満たすことで、南北戦争敗戦前の既得権益層である白人富裕層は、社会そのものの崩壊後も生き方を変えなくても許されるのだと思える安心感が得られる。この白人特権階級にとっての安心感こそが、『風と共に去りぬ』における「古き良き南部」の調和の正体であると証明したい。

「古き良き南部」は序論でも述べた通り、プランター階級にある白人が送る貴族的かつ牧歌的な暮らしを指すものであり、アシュリはこれを「ギリシャ美術のように欠くところがない完成度と乱れない調和があった」（第3巻 238）と表現している。そして彼はこの暮らしを振り返る際、マグノリアの花が咲き誇り、白い支柱に月明かりが差し込む屋敷の玄関ポーチで縫い物をする母を挙げている（第2巻 13）。ここで、母親が家庭での仕事に従事する光景をあえて述べていることに注目したい。南部の基幹産業である農作業ではなく、縫い物という趣味も兼ねた非肉体労働にとりかかる女性をアシュリは連想している。ここから「古き良き南部」の調和とは、上流階級の暮らしのみを反映させたものであることが分かる。なぜなら、南部という農業中心社会において、妻が家庭内の仕事にのみ注力できる環境を用意できるのは、多数の奴隷を所有できる大農園主家庭のみであるからだ。実際『風と共に去りぬ』においても、わずかな奴隷と土地しか持たないプア・ホワイト（貧乏白人）の苦しい生活が詳細に描写されており、妻だけでなく子供たち全員が、3エーカーばかりの土地を奴隷なしでがむしゃらに耕している（第1巻 110）。このような有様のプア・ホワイトを、プランター階級の人々が嘲笑する様子も何度も描かれており、南北戦争敗戦後、荒廃したスカーレットの実家のプランテーションの管理を請け負い、スカーレットの良き相談相手となっていたウィル・ベンティーンという

青年が、スカーレットの妹と婚約した際にも、上流社会の人々は、彼がプランター階級出身でないことを理由に難色を示している（第4巻 239-241）。同じ南部人といえども決して一枚岩ではなく、強固な階級意識や格差による分断が存在していたのである。作中では、アシュリやスカーレットらが属する、所有奴隷が100人を超え、広大な屋敷で大勢の使用人にかしづかれながら優雅に暮らす大農園家庭が多数派であったかのように描かれている。しかし史実のアメリカ南部では、「奴隷所有者の72パーセントが所有する奴隷の数は10人足らずで、50パーセントは5人より少ない数の奴隷しか所有していなかった」（ノートンほか 248）とされる。作中でプア・ホワイトと呼ばれていた家庭が、実際は南部で大部分を占めていたのである。このような家庭では、男性が労働、女性は家庭という性別による仕事の分担は不可能であり、女性も農園での労働に従事していた。E・H・アルトバックは、テキサス州で農業に従事していた白人女性の労働を記録しており、それによると彼女は綿の剪定からトムロコソ畑の草刈り、果ては週に1回、他家の洗濯仕事に雇われ、家から10マイルほど離れた川へ水を汲みに行っていたという（34）。ここから、『風と共に去りぬ』で描かれているような、大豪邸に住まい、妻は家庭内で家事や教育に専念し、奴隷にかしづかれながら豪華な暮らしを送っているスカーレットたち最上流のプランター家庭は、史実の南部ではそれほど多数派ではなかったことが窺える。しかし、史実の大部分の南部家庭では実現不可能な、大農園主家庭の貴族的文化こそが、『風と共に去りぬ』における「古き良き南部」の、「ギリシャ美術のように欠くところがない」調和であるとみなされていた。その理由として、北部の工業、商業中心主義への南部の対抗心が挙げられる。『風と共に去りぬ』では南部と北部の不和が頻繁に描かれているが、特に南部では、北部の「金儲けやその貪欲さや商業主義をせせら笑っている」（第2巻 14）人間が多い。北部との差別化を図るため、作中の南部人は自らに貴族的イメージを付与し、「チャミングで、のどかで、決してヤンキー〔北部人〕のようにお金でせかせか」（第3巻 416-417）しない有閑階級としてのアイデンティティを確立させようとしているのである。

次に、調和を形作るもう一つの要素である同質性について述べ、南部人が「似た者同士」を愛し、同質社会を構築することで調和を維持していたことを明らかにする。この「似たもの同士」という言葉は作中に何度も登場する。スカーレットの父ジェラルドは、「人間はな、似た者同士が結婚してはじめて幸せになれる」（第1巻 77）と豪語し、後にメラニーの夫となるアシュリがスカーレットに思いを告げられた際にも、彼は結婚とは2人が似た者同士でないとうまく行かないと論している（第1巻 262）。アシュリとメラニーは実はいとこ同士の結婚であり、同じく親戚同士の親から似たような教育を受け、似たような価値観（紳士的な農園主を頂点とし、妻が献身的に夫に奉仕する封建的家庭観）を持ち、生活基盤が壊れた敗戦後において、自らの生き方を変える柔軟性もお互い欠如していた。作中においてアシュリの実家ウィルクス家はいとこ婚を何世代にもわたって続けていることが明かされている。加えてメラニーの暮らす南部の街アトランタでは、半数がメラニーの親戚を自称できるほど家系図が複雑に入り組んでおり、南部上流階級がいかに同格の家同士の婚姻を続けてきたかが読み取れる。南部では、家格のつり合いがとれ、お互い顔見知りの両家の親が決める縁談こそが、恋愛結婚に勝る最良の選択とされた。

そのような「似た者同士」の結婚を続けてきた南部上流階級の人々は、人間性も当然似通ってくる。女性ならひたすら子供と夫を愛する無知でか弱い牝鹿のような存在となり、男性であればつねに紳士的にふるまい、女性が暮らしやすいよう礼儀を尽くすべし。また家名を重んじ、一族に恥をかかせることがないよう、本音は優美さや恭しい礼儀作法でそつなく伏せることが望ましい。このような人々は、「みんな同じ型から作ったような顔」（第1巻 415）をしているという。南部では、「中世の封建制度と同じくらいに時代錯誤」（第2巻 76）な伝統が未だ息づいており、そしてそれを誰も捨てようとししない。スカーレットの起業が異常なまでにバッシングにさらされた理由として、南部人が何世代もかけて形成してきた型を破壊する存在とみなされたためである。女性は男性を頼って生きるものという明確な規範が存在する中、男性の手も借りずに経済的自立を遂げるという行為は、「古き良き南部」の絶対的な不文律、「わたしたちと違うことをしたら、承知しないわよ！」（第4巻 156）へのまぎれもない裏切りなのである。

このように、「古き良き南部」の裏切り者とみなされ排除されたスカーレットであるが、彼女自身、南部への郷愁を捨てきれないと読み取れる箇所がいくつも存在する。序論でも述べた通り、スカーレットの起業は家族を養うためであり、男性からの経済的支配から結果として抜け出すことができただけで、本人がそれを意図しての行動ではないことに留意したい。加えて物語後半、スカーレットは戦前の南部の暮らしの中に、「安心感」（第5巻 254）があったと振り返っている。この「のどかな時代」の完成には、他者の多様性に不寛容な同質性が不可欠であり、スカーレット自身もそれに何度も苦しめられてきたにもかかわらず、そこには目を向けずただただ美しい調和があったとして南部を記憶している。石村健によれば、南部人は故郷の潔白を否定する際、「南部連合から生まれた「心の故郷」にたいする、（中略）死んだ祖先にたいする、そして自分にたいする裏切り行為」（56）と感じてしまう。スカーレットも心のどこかで自身の南部の女性ジェンダーを壊す振舞いが、南部社会への裏切り、そして一族への裏切りとなっていることに罪悪感を覚えていたのだろう。製材所経営が成功し、莫大な資産を自分自身で築いた後も、彼女は不思議と幸せだと思えないと心の中で呟いていた（第5巻 381）。だからこそ、「古き良き南部」になんの憂いもなく属することができていた戦前の暮らしに対して、安心感を得ていたと言ったのである。経済的自立を遂げたという点では革新的と評されるスカーレットではあるが、その実「古き良き南部」を肯定する同質主義だけは消し去ることはできなかったのである。

以上、「古き良き南部」の構成要素である「上流階級」、「似た者同士」とは、それぞれどのようなものであるのかを述べた。ここからは、上記の条件を満たした人間のみで共同体を構成することで生まれる調和（＝安心感）がどのようなものであったかを論じていく。

まず、南北戦争敗戦後の旧南部上流階級の人々の暮らしがどのようなものであったかを述べたい。奴隷解放によって経済基盤であったプランテーションを維持できなくなり、土地を売り払い、子供が空腹にあえぐほど日々の食べ物にも困るような暮らしを送る中でも、彼らは戦前の「型」にはまった同質的な生き方を変えることはなかった。男性は皆、同じ戦火と困窮を潜り抜けたはずの女性に、「荒っぽいものが目に触れてはいけない」（第3巻 415）と箱入り娘に

対するような慇懃な態度を崩さず、女性も博識な男性に頼りきりで、労働は手芸、陶器の絵付け、ピアノ教室など、旧来の女性らしさから逸脱しない程度のものにとどめるべきという認識を改めることはなかった。冠婚葬祭などの家名を誇示する行事には湯水のようにお金を使い、日々の食事に事欠く家計の中でもそれを表に出すようなみっともない真似はせず、「人生に微笑みかけ、優雅にお辞儀をして、やり過ごす」（第4巻 416）。豊かであった面影はもはや何も残っておらずとも、彼らは紳士淑女としての職分を忘れず「不朽の威厳と矜持を漂わせ」（第3巻 414）た貴族のような暮らしを続けていた。

彼らの振舞いには、変化を嫌う南部人の保守的な性質が前面に現れているといえよう。敗戦後のメラニーの「変わることを拒み、移りゆく世の中にあって変化することは理にかなっていないと言った理屈は認めない」（第4巻 281）というセリフからも分かる通りである。戦前の豊かな暮らしをとりもどすためには、スカーレットのように「名誉も家名もかなぐり捨てる覚悟」で、「世知辛く厳しい戦いが必要」である（第4巻 419-420）。しかし、多くの南部人はそのような柔軟性を持つことはない。戦前の財産を取り戻すためでも、家族を飢えから守るためであっても、南部の古くからの様式から外れた生き方をするくらいなら、潔く餓死を選ぶ。実際レットの父親はこの思想に殉じて戦後亡くなっており、アシュリも敗戦によって生き方を変えなければならない現実を「死ぬよりひどいこと」（第3巻 241）であると述べている。南部人にとって不変とは、合理性を超越した一種の正しさなのである。

この、自分は南部流の正しさに殉じているのだという安心感は、実社会に適応できずに没落していく南部上流階級にとって、一種の救いであったと言えよう。どれほど暮らしが困窮しようと、女性は家庭内の仕事にとどまり、男性も大農園主としての名誉にしがみつき、農作業や製材所経営といった実務には適応しない。その結果生活は困窮し上流階級としての体面が保てなくなり、家名は没落していく。しかしこの正しさに従う限り、その人間は「りっぱな貴婦人」、「りっぱな紳士」として世間から大喝采を浴びることができる。「古き良き南部」が持つ絶対的な不文律、不変性を、その南部人は遵守しているためである。

この「古き良き南部」の安心感を得るために、『風と共に去りぬ』における南部富裕層は、プランテーション社会そのものが消え失せてもなお、形骸化した形式にしがみついた。戦前の南部上流階級の封建的な価値観を否定しない人間だけで周囲を固め同質的な調和を築くことで、厳しい現実を直視し、自分を変える苦しい努力をしなくてもいいと思える「古き良き南部」の調和を維持したのである。

第二節 「サザン・ベル」の役割

第二節では、『風と共に去りぬ』と史実の南部における「サザン・ベル」像がどのようなものであったかを考察し、彼女たちに付与された属性が、農園主である夫を頂点とする家庭や、家庭の延長上にある「古き良き南部」社会の調和の維持に貢献する存在であったことを証明したい。

「サザン・ベル」という用語は、直訳すると「南部美人」という意味を持つ。完璧な淑女であるためには「美人」でなくてはならないという願望が暗に含まれると考えられるが、大井浩

二が「男性に対する従順さという女性的な特性を失わず」、「完璧」と「服従」という理想を身につけるよう育てられた「従順な女性」(6)と「サザン・ベル」を定義していることから分かる通り、この願望は男性主体のものである。この「美人」にも、ただ美しい容姿ではなく、農園主たちの自己顕示欲を満たすための「美しさ」というニュアンスが強く含まれている。以下、作中で本物の「りっぱな貴婦人」(第5巻 91)と称されたスカーレットの母エレンとスカーレットの友人メラニーを参考に、『風と共に去りぬ』で描かれた「サザン・ベル」の容姿が、農園主たちの願望を反映したものであることを証明する。エレン、メラニーの容姿はそれぞれ「誇り高くありつつも決して高飛車な印象を与えない表情、かつ慈悲深さと憂いをふくみ、まじめ一方であるのがうかがえる顔つき」(第1巻 90)、「大地のように素朴で、パンのように善良」であるが、人の心に触れる「おちついた貫禄」(第1巻 227)がある、というもので、どちらも派手さはないものの、気高さと落ち着きを備えた儂げな印象を持つ女性である。これが主人公のスカーレットとなると、「つとめてやさしげな顔をしているが、そうした顔のなかにあっても翠の瞳は荒々しさを秘め、てこでも譲らぬ意志の強さと貪欲な生命力をうかがわせる」(第1巻 9)と描写されている。「サザン・ベル」の2人とスカーレットの違いは、男性にとって御しやすい美人であるか否かという点である。メラニーとエレンは、容姿のイメージ通り夫に従順で、家族の幸せにすべての慈愛を捧げるような女性である。メラニーは「妻の立場から夫に小言を言おうなどと思ったこともなく、神のご意思を除けば、彼の決定に勝るものはない」(第4巻 269)と考えるほど夫に心酔し、決定権のすべてをゆだねている。対してスカーレットも地元の男性のほぼ全員を虜にするような美人ではあるが「りっぱな貴婦人」、「サザン・ベル」と呼ばれることはない。実際彼女は夫にかしづく従順な妻ではなく、働きに出るため夜遅くまで町を出歩くことに反対する2番目の夫フランクに対し幾度となく強い態度で反発している。彼女の「てこでも譲らぬ意志の強さ」を秘める翠の瞳には、フランクも何度も辟易とさせられただろう。スカーレットは彼女より、年齢も人生経験も豊富な3番目の夫レット・バトラーに「自分を愛する男どもをいたぶる」(第5巻 494)女と評されていた。このように、いくら女性の容姿が魅力的であろうと、男性が自身への敬意と従順さを見て取れなければ、その女性は南部美人とは言えない。農園主たちは、自身の箔付けのために妻には美しくあるよう求めるが、夫を凌駕するようなたくましさ、強さを秘めた美は必要としていないのである。『風と共に去りぬ』の「サザン・ベル」である、エレン、メラニーの人格やそれを映した容姿は、このような農園主たちの願望を反映したものと言えよう。夫を尊敬し、農園主としての矜持を傷つけない慎ましい美人という、男性のトロフィーワイフとして優秀な女性を、当時の農園主たちは「サザン・ベル」と銘打って賞賛したのである。

また「サザン・ベル」は、男性相手だけでなく年配者や同世代、使用人に至るまであらゆる相手に配慮し、彼らが気分良く暮らせるような演技や振舞いが求められる存在であった。歴史上の南部家庭は「家長を中心とする封建的家庭」であり、「特に女性の行動は縛られ、(中略)女性として何をすべきで、何をしてはいけないか等、細かく注意を受けていた」(谷中 44)という。『風と共に去りぬ』においてもそれらのしきたりは要所に反映されている。スカーレットの母エレンは娘たちに対し、結婚前であれば「なによりも愛らしくて、しとやかで、うつく

しく、その場に華を添える存在でなくてはならない」(第1巻 126)と伝えている。「年配のご婦人相手には、かわいく、あどけなく、できるかぎり単純そうに見せるべし」とされ、また老紳士に対しては「小癪で、生意気で、あくまでやりすぎはご法度だが、じゃれつくくらいがちょうどいい」(第1巻 386-387)。また、いかなる相手に対しても、自分の本心を口にしてはならない。エレンはスカーレットに対し、男性との会話では、たとえ自分のほうがその話題に詳しいと分かっても、割り込むような真似は決してしてはならないと厳命している。実際エレンは、隣家の出産を手伝った後、ようやくありつけた食事の最中でも、夫が話したがっている政治論に積極的に耳を傾けている。しかし、決して反論することはない。こうした振舞いは、史実上の南部において「人前で政治について自分の意見を述べたり、男性に交じって討論することは、女性のすべきことではないとされ」(谷中 40)ていた風潮の反映である。政治などの高度な議論において、女性が男性と対等に渡り合える知性を見せびらかすことは、南部では許されることではなかった。南部の若い娘の役割はひたすら無垢さと素直さをもって周囲の人間を癒すことであり、他者の意見に口答えするような知性、活発さは「サザン・ベル」としてあってはならないのである。無垢で可憐な少女を演じ続ける技量を持つ少女が、一片の知性も持ち合わせていないはずはないのだが、とにかく若い娘は「無力ゆえ男にすぎるしかない牝鹿のような」(第1巻 179)女になることが求められた。

しかし彼女たちは、一度嫁げばプランテーションで暮らす家族、奴隷を合わせた数十人の世帯を管理する、いわば家庭内に「秩序と威厳と品格」をもたらす良妻賢母となることを求められる(第1巻 128)。瀧野哲郎は、農園主の妻が「奴隷や使用人に適切な配慮を払うなど、プランテーション維持のために大切な役割を担うことが多かった」(『農園主と奴隷のアメリカ』110-111)と述べ、その例として19世紀サウスカロライナ州の上流階級に生まれたメアリ・ボイキン・チェスナットの日記を挙げている。チェスナット夫人は周囲の白人女性を「上品で、高潔、そして善良で、敬虔な人たちであり」、「自らを犠牲にしてまで」、黒人の世話をし、他人のために尽くしている」(瀧野『農園主と奴隷のアメリカ』107-108)と考えていた。『風と共に去りぬ』においても、農園主の妻たちが、プランテーションという夫、子供、白人労働者、黒人奴隷が同居する一種の共同体の中で、夫の経営がつつがなく進むよう家政を一身に引き受けている。エレンも15歳でジェラルドのもとに嫁いでからは、「料理、看病、裁縫、洗濯物〔を手掛ける奴隷の〕監督」から病人の看護、庭木の手入れに奴隷や娘たちの教育など、家庭に発生するあらゆる心配りを一手に担っている(第1巻 115)。また常に手には縫い物が握られており、その仕事の間でさえスカーレットは、エレンが椅子の背もたれにもたれる姿を見たことがないという。無垢な少女時代から一転、家政をつかさどる知性が突如として必要とされるのである。しかし、結婚後求められているこの知性も、農園主である夫に都合のいいものに歪曲されていることは明らかである。女性に求められる知性は、家政をつかさどり、男性の話に驚嘆できる男性優位のものとどまる。「サザン・ベル」に求められる知性も愛らしさも、正反対のようで、男性を安心させるために必要な素養という点で一致している。

「サザン・ベル」という伝統の中で育てられた南部女性は、この伝統に沿った生き方こそ女性性としての唯一の幸福であると信じ、次の世代に継承していった。南部の中でもより封建的家

族観が確立していたジョージア州サヴァナの旧家に生まれたエレンもその価値観に準じていた。なにかと伝統という抑圧が付きまとう人生の中でエレンは、自らの不自由さを嘆いた経験があったか、作中では明記されていない。しかし彼女は、自身の人生にある程度の諦念と覚悟を持っていたことが以下の台詞から分かる。

エレンの人生は楽なものでも、楽しいものでもなかったが、人生は楽なものとは思っていなかったし、楽しくない人生であれ、それが女の運命であった。ここは男の世界であり、そういうものとして受け入れていたのである。男が財産を所有し、女がそれを切り回す。しかし運営がうまくいけば夫の手柄とされ、妻はその才覚を誉める側に回る。(中略) 男たちは粗野で、ずけずけものを言うが、女はいつもやさしく、慈悲深く、寛大である。(第1巻 129-130)

実はエレンは少女時代、愛する男性と死別した経験を持つ。恋人の死の要因となった家族から離れるため、現在の夫に嫁いだのである。彼女の当時の心境として「自分というものをほとんどサヴァナにおいてきた」と語っている。結婚以降、エレンは空になった自分の穴を埋めるように、夫への献身、農園の切り盛り、子どもたちの世話に邁進した。この生活の中で、当然母として、妻としての幸せを感じた瞬間も多くあっただろう。しかし、「りっぱな貴婦人」という強固な伝統の中で育ってきたエレンは、結婚して良妻賢母となる以外、死別の痛みを乗り越える術を持たなかったことも事実である。自分はここで生きるしかないという、人生への覚悟と諦念をもって、エレンは自身の務めを全うしたのである。

また、「サザン・ベル」に必要な資質として、南部への熱狂的な愛郷心が挙げられる。これは主に南北戦争下での、女性たちの南部連合軍への狂信的な献身から見ることができる。谷中は「兵士に激励の手紙を書いたり、カーテン、シーツから兵士のシャツや包帯を作ったり、(中略) 病院に看護婦として働きに出たり」(45) と、南北戦争下の女性たちが奉仕活動に積極的に取り組んでいたことを明らかにしている。『風と共に去りぬ』においても、女性たちは戦争勃発後、戦地への補給のための綿花やとうもろこし、豚や羊や牛を飼育し、惜しまず軍に提供した(第1巻 298)。また傷病兵士の看護を受け持ち、シラミ取りや果ては手足の切断手術の助手までも務めている。南部の女性たちは「身も心も粉にして大義に仕え、(中略) 一大義のために必要とあらば、このすばらしい[南部の] 男たちでさえ差し出し、よしんば喪うことになろうと、(中略) 悲しみに気高く耐え」(第1巻 380) ることを期待されていた。南北戦争勃発前の南部上流階級では、女性が家庭外の仕事に従事することに強い偏見があった(谷中 45)。本来家庭内で家族にのみ奉仕するはずの「サザン・ベル」が、自身の職分から外れ看護婦として働きながら、愛する夫や息子を亡くそうとも毅然と勝利を信じ、南部への忠義を忘れず奉仕し続けている。であれば南部全体が一致団結し、「古き良き南部」を守るため、南部連合の勝利に貢献しなければならない。「サザン・ベル」の愛郷心は、南部人の戦意向上のためのプロパガンダにも用いられていたのである。

また「サザン・ベル」の「古き良き南部」への愛郷心は、南部の南北戦争敗戦後も途絶える

ことはなかった。南部では敗戦後、貧窮から抜け出そうと北部人に擦り寄る者と、憎しみを忘れられない人々との間に溝が生まれ、南部社会は分裂の危機にあった。その中で、スカーレットの親友であり、後に「伝説」（第5巻 484）の淑女と称されるメラニーは戦争の辛苦を味わいながらも「古き良き南部」への忠心を忘れることなく、夫に尽くし年長者を敬い、戦前の「サザン・ベル」の献身の精神を持続ける。「メラニーは変わることを拒み、移りゆく世の中であって変化することは理にかなっていると言った理屈は認めない」（第4巻 281）。敗戦後北部に寝返る南部人や北部の将校と駆け落ちする娘が続出し、失われつつあった南部の絆を、メラニーは戦前の「サザン・ベル」の精神で繋ぎ止めていた。その様子は、「まるで、一度は戦争で散りちりになって打ちのめされ、身内の死で涙も枯れて、世の中の変化に戸惑っていたアトランタの上流社会が、メラニーという揺るぎない中心人物を得て、その周りに社交界を再編し始めた」（第4巻 280）と評された。「サザン・ベル」は夫に尽くすことで「古き良き南部」の家庭を維持しながら、また同時に南部社会の調和にも貢献しているのである。

なぜ「サザン・ベル」は家庭と南部社会の調和の守り手という、一見対照的な役割を与えられたのか。それは南部上流階級の血縁主義が起因すると考えられる。瀧野は、チェスナット夫人が自身を「生粋の南部人」と捉えている点や、日記でストウ、ハリエット・ビーチャーの小説『アンクル・トムの小屋』を痛烈に批判していることから、彼女が南部に対し一際強い愛国心を有していたと考察している（『農園主と奴隷のアメリカ』 107）。夫人は州知事の父のもとに生まれ州上院議員の夫を持っていたことから、彼らの政治活動の最中、南部連合の大統領となるジェファソン・デイヴィスなど著名な政治家や軍人と関わる機会も多かった（瀧野『農園主と奴隷のアメリカ』 104-105）。南部の政治機構の中核に親族や友人が多数存在していたことから、チェスナット夫人にとって南部への愛国心とは、そのまま家族や友人を愛する心と同義だったと考えることもできる。実際、南北戦争参加の動機である愛国心の根源として、南部女性には「血縁への忠誠心」が強い比重を占めていたと指摘されている（田中 145）。実際『風と共に去りぬ』においても、メラニーの父親は軍人であり、夫のアシュリーも南部連合の少佐として戦っている。南部人の同族意識は強いものがあった。第一節でも述べた通り、南部の上流階級は、半数がメラニーの親戚を自称できるほど家系図が複雑に入り組んでいる。この血縁による昔ながらの強い結束力によって、一族として数々の苦境に立ち向かってきたという（第5巻 319）。つまり南部人にとって血縁の一致は、そのまま価値観の一致を示すものであり、同じ血が流れているからこそ団結できるのだと考えているのである。このような環境で育ったスカーレットは、夫のレットから素性の知れない、少なくとも南部の旧家出身ではない友人を何人も紹介されたが、その際彼らが、かつてスカーレットが関わってきた上流階級の男性たちとは違い、「自分の家族や家系について誇らしく語り、南部全域に及ぶ込み入った迷路のような一族の相関図をたどってみせ」なかったことに驚いていた（第5巻 89）。南部人が家系について語るということは、自分が相手と同じ南部の血を引いた人間であることの証明であり、南部人を安心させるロジックの一種なのである。南部人にとって社会とは血縁で結ばれた家族の存在であり、南部を愛するということはすなわち家族を愛することに他ならない。であれば、前述したように『風と共に去りぬ』の女性たちが、家庭と社会の両方の調和を守る役割を付与さ

れていた理由にも説明がつく。『風と共に去りぬ』の「サザン・ベル」は、慈悲と献身の精神で家庭の調和を守りながら、家庭の拡大版である南部社会全体にも同様の精神で奉仕することで、南部人全体の団結を促している。家庭の守り手と社会の守り手は、一見対照的なようでいて、その実同じフィールドに収まる職分なのである。

第二章 「古き良き南部」の調和を生み出す農園主たちの名誉

第二章では、農園主の地位にあった南部の白人男性が持つ名誉と、「古き良き南部」の調和との関係性について論じる。『風と共に去りぬ』に登場する男性たちの、女性に対する扱いは一貫している。常に慇懃な態度で守るべき対象であり、知性を称賛しあう対等な関係ではない。彼らの妻との関係を検証し、農園主たちが「古き良き南部」という枠組みの中で、家父長としての名誉、女性や奴隷に対する賢明な指導者としての名誉を付与されていたことを明らかにする。また「古き良き南部」における保守的なジェンダー観は、農園主たちの名誉を守るために存在していたことを証明したい。

第一節 農園主たちの名誉とは

第一節では、『風と共に去りぬ』において農園主アシュリがたびたび言及していた、自らの名誉とはどのようなものであったかを読み取り、それが自らの紳士性や高潔さを重んじ、自身より劣った家族や奴隷を守り導きながら、養い手、奴隷主としての権威を独占できる権利であったと証明する。

まずは史実のアメリカ南部の家父長制について確認していく。18世紀ヴァージニアの農園主であったウィリアム・バードは、13歳年下の妻ルーシーに対して、生活の様々な面、ときに家事、育児、服装など、女性の領域である事柄に対しても過剰に干渉し、彼の家父長としての名誉を存分に妻に誇示していたことが彼の日記にて綴られている（瀧野『農園主と奴隷のアメリカ』38）。瀧野によれば、「バードは、女性は男性よりも劣るという当時の社会通念から、妻が夫に服従するのは当然であると考えていた」（『農園主と奴隷のアメリカ』40）。妻の一举手一投足に細かく干渉することで支配し、反発する彼女を押さえつけることで、プランテーション内の絶大な父権を維持しようとした。また、人が持つ知性に関しても、南部には男は博識、女はもの知らずという男性優位の通説が存在した。バードは妻に対し、「書斎の本を彼女に貸さなかった」（瀧野『農園主と奴隷のアメリカ』40）という。読書という文化的な趣味を独占することで、彼が妻に対し知性の面でも優位に立とうとしていたことは明らかである。あくまで女性は男性の所有物であり、経済面であれ家庭内の権力であれ、女性が男性を圧倒するなどあってはならないという認識が南部全体で広まっていたことが分かる。ある南部上流階級の女性は結婚という制度を冷静に分析し「作法は騎士のように礼儀正しいけれども自分が世のなかの中心だと思っている、そんな男たちに依存したものになる」（ノートンほか 254-255）と述べている。その女性は、夫が妻にかけける温情の本質についても考察している。「〔夫たちが〕妻のことを気にかけるようなことがあったとしても、それはただ召使いのようなものとして気にかけているだけなのです。〔妻とは〕夫が快適に過ごせるよう身の回りの世話をし、子供たち

が夫の邪魔にならないようにさせておくために作られたものと思っているのです」(ノートンほか 255)。夫のやさしさとは、主人が奴隷にそうするように、有用な道具を長持ちさせるための手入れのようなものに過ぎないと彼女は考えているのである。

『風と共に去りぬ』における男性たちも、史実の農園主像を踏襲している。南部の男性は「レディとあらば、この世のなにもかもを喜んでさしだしたが、ただひとつ、知性への賛辞だけは与えようとしなかった」(第1巻 345)という。スカーレットの2番目の夫フランクも、結婚前はなにかにつけ無知な振舞いをする妻に対し愛情を感じていたが、結婚後、スカーレットが自分よりもはるかに卓越した利益の算出や営業スキルを備えていたことにひたすら面食らっている。彼自身は足し算も3ケタ以上になると筆算が必要であるが、スカーレットがそれより長い計算を暗算でこなした際には仰天し、また「女らしくないもの」(第4巻 18)を感じている。またスカーレットがフランクに、所有する雑貨店の収支について質問する度に、このようなつまらないことでお前のかわいい頭を悩ませるわけにはいかないと穏やかにはぐらかし、その都度スカーレットを憤慨させている(第4巻 17)。このシーンからも、農園主の男性が、スカーレットが周囲が安らげる心配りをするための女性流の機転の利かせ方ではなく、ビジネスや数学という男性と同様の知性を持っている事実への反感を持っていることが明らかである。フランクや知人の男性たちは、「妻というのは、物知りの夫に導かれるべきであり、夫の意見を全面に受け入れ、自分なりの意見など持つべきでない」(第4巻 63)と考えている。夫の庇護下に収まる貞淑な妻である限り、彼らは「ふわふわとして非力な生き物のおろかしい考えを満足させ」(第4巻 63)、決して彼女たちが傷つかないよう細心の注意を払う。スカーレットが結婚生活の中で、しばしば癩癪を起し家族を困惑させた際も、フランクは「頭にくるほどの優しさ」(第4巻 131)で耐え忍び、女性という無力な存在は男である自分が守らなければならないという態度を崩さなかった。これらは相手は無意識に見下しているからこそその寛容さではあるが、この描写のみを読んで、南部の家父長制が善であったと誤解する者がいたとしてもおかしくはない。一見すると男性は女性を崇拝しているように見えるが、彼らの行動は、自らより劣った存在へのパターンリズム的な温情であることが明らかである。「サザン・ベル」は愛らしくてしとやかな家庭の守護者であらねばならなかったと述べたが、そうした振舞いを南部の少女たちが期待される背景には、こうした男性の、自身の家父長的な権威を維持したいという欲望が垣間見える。女性に対し経済的、知性や教養の面で優越することで、家父長としての名誉は保たれていたのである。

また農園主の男性たちは、一家の養い手、稼ぎ手としての名誉も強く重んじていたことがうかがえる。農園主たちは、いくら生活が困窮していようが、スカーレットという女性が営む製材所では働こうとしなかった。スカーレットが事業を拡大する際、アトランタの名家出身の男性たちに助力を請うと、彼らは「女性の下ではたらくぐらいなら、自分で決めた仕事をするほうがいい」と返し、男にはどん底に落ちてもプライドだけは売るほどあるのだと自嘲気味に呟いている(第4巻 126)。男性は仕事、女性は家庭という保守的な家族モデルにそって生きてきた南部人にとって、スカーレットの経営者としての働きぶりは常軌を逸した振舞いであり、非難せざるをえなかった。しかし彼女以外にも働いて生活費を稼ぐ女性たちがいたことから、

なぜ自分の行為だけこれほど非難されるのか理解できないスカーレットに対し、レットはこう分析している。

そのご婦人がたは仕事といっても慎ましいもので、南部の男たちの篤いプライドを傷つけたりしない。男たちは鷹揚にこう言っている。「世間知らずのご婦人たちも、なかなか良く頑張っているよ！ まあ、役に立っていると思わせていてやろう」。しかもきみの挙げたレディたちは働くことを楽しんじやない。女だてらにこんな仕事をしているけれど、殿方がこの重荷から解放してくれたらいつでも辞めますと、そういう態度を表明している。だから世間は同情するんだよ。(第4巻 156-157)

農園主の男性たちは、自身が敗戦前は独占していた一家の大黒柱としての名誉を強く重んじていたのである。一家を養うことで家族に対し得られる優越や名誉をもつべきは男性のみであるべきという、家父長的な思想が内包されているといえよう。戦前の農園主は、プランテーションの所有者として綿花がもたらす莫大な利益を享受し、なんの憂いもなく家族を養うことができた。しかし敗戦後、彼らは日々の生活費を捻出することがやっとの生活を送るほどの没落状態に陥る。そのような苦境の最中、家庭にとどまり、夫の手中に収まっているべき女性であるはずのスカーレットが起業に成功したというのは、農園主たちにとって不愉快な事実であり、家父長としての名誉を、女性に奪われたと感じたのだろう。アシュリは自身の実家が焼失した後、妻と息子と共にスカーレットの実家に同居している。スカーレットがアトランタで出稼ぎに出て、その仕送りによって生活ができていた状況について、直接的な不満をぶつけたわけではないものの、「耐えがたい痛みにひそかに苛まれているかのようで」、「明るい金髪には今や白髪が交じり、疲れのにじむ両の肩を力なく落として」(第4巻 342)おり、見るからに覇気の失せた様子である。これもまた、自身の大きなアイデンティティのひとつであった名誉を失ったことへの落胆や絶望と考えられよう。南北戦争敗戦後、南部には「『女々しい男』と、男の尻をたたいて『反乱』を起させる『男おんな』の南部女」(越智 258)というイメージが付与された。この敗戦後の男女の関係は、アシュリとスカーレットの関係にそのまま当てはめることができる。養い手としての名誉を失った南部農園主は、自身の「男らしさ」を構成する一部が失われ、いわば「女性化」していた。彼らにとって家父長、養い手としての名誉は、農園主である自分を構成する重要なファクターだったのである。

農園主の名誉を維持するための妻への家父長的干渉は、彼らの所有する奴隷に対する態度と一致していると言えよう。史実の南部において、非常に裕福な農園主は奴隷に対し「温情的権威主義というイデオロギーを通して奴隷たちを支配していた」(ノートンほか 251)という。この関係は、解放された元黒人奴隷によって、「働きもののいい馬を持っている人が、その馬の世話をするように、毎回ちゃんと食べ物をつまぷり食わせてくれ」るようなものであると表現されている(ノートンほか 264)。そして『風と共に去りぬ』では一貫して、奴隷と白人の間では穏やかな関係が営まれている。彼ら奴隷は、農園主の息子たちと対等に議論を交わし、白人のピクニックにバンジョーとハモニカを持って陽気に同行している。当然鞭打ちに遭う奴

隷もない。南部の奴隷解放後も、進んで白人家庭に留まり元主人の世話を焼き続けている。しかし、ジェラルドが奴隷市場で同時に母娘の奴隷を購入したことを、南部中の人間が善行であると捉え、人間の売買について一抹の疑問も抱いていない点を見ると、彼ら白人に、黒人が同等の権利を持つ存在であるという意識は希薄であったとしか考えられない。加えて農園主であったアシュリは、敗戦前の奴隷に対し「彼らは不幸ではなかった」（第5巻 377）と断言していた。黒人奴隷に対しては「子どもと同じで優しく接し、教え諭し、褒めてかわいがって叱ってやらなくてはいけない」（第4巻 145）と定めている。つまり農園主にとって黒人奴隷とは、知能で劣った彼らをうまく活用し庇護する代わりに妄信的に従わせる、パターンリズム的な愛を付与する存在であったことが分かる。自身と奴隷との間に明確な序列を設け、その範疇で自由を認め、彼らが利益を出し続けることを条件に温情的態度を約束する。農園主が奴隷制を論じる際、「商業的農業の持つ利潤追求の側面は強調せずに、「身分が高いものに課せられる道徳的責任」という側面に焦点を当てた」（ノートンほか 251）という。つまり農園主は、自身は奴隷の抑圧者ではなく、劣った存在を導く指導者、保護者のような存在であると自負していたのである。であれば奴隷制は農園主にとって、温情的な主、良き保護者という、農園主の紳士としての名誉を強化するものとして機能していたとともとれる。農園主が奴隷の良き保護者であったという迷信じみた言説は、表面上の恭しさをもって、強固で封建的な家父長制度を家庭内に敷いていた妻への抑圧にも共通する。奴隷制は、妻に対し、養い手として豊かな暮らしを約束する代わりに、無知と従順さをもって奉仕するよう強いる家父長制と類似しており、また農園主の名誉とは、妻や奴隷を抑圧し、プランテーション内の頂点として君臨する強き権威を指している。

第二節 農園主の名誉と「古き良き南部」の調和

第二節では「古き良き南部」の調和の存在意義について論じる。旧来のプランテーション制が崩壊した敗戦後にあっても頑固に調和を維持することで、最も「安心感」を得ていたのは誰であったのかという問いについて考える。そしてそれが農園主である白人男性であり、つまり「古き良き南部」の調和とは、男性の名誉を守るために存在していたことを証明したい。

まず、第一章第一節にて挙げた、上流階級という「古き良き南部」の調和が、農園主の名誉のために存在していたことを証明する。第二章第一節では、女性に対する農園主の養い手としての名誉について述べた。しかし、農園主が奴隷制プランテーションによって得られる莫大な利益を独占できる優越は、同性ではあっても経済状況に圧倒的な差がついている非奴隷所有者の男性に対しても有効である。ヒルトン・R・ハーバーという南部下層階級出身の男性の手記では、非奴隷所有白人は南部人口の7割を構成しているにもかかわらず、残りのわずかな農園主によって「村の治安判事地区の保安官、町長、市長、郡の保安官、諸々の裁判所の判事、州議会議員、州知事、上下院議員」など、政治の中枢に位置する特権を牛耳られていると述べている（ウィルソン 248）。ハーバーは南部における農園主の権威を「神託伝達者」、「裁定者」と表現し、奴隷を持たない人々に対し農園主が常に感じていた優越を、以下のように書き残している。

南部では、いかなる労働も自由であったり尊敬されたりしない。どんなに能力があっても、道徳的にいかに模範的であっても、額に汗流してあるいは自らの力でパンを稼がねばならないような者はいかなる白人といえども、嫌うべき獣として扱われて最大限の軽蔑をもって忌避される。(中略) 奴隷を所有していなければ―彼自身が奴隷であって―一人前の人間として数えられず、鞭を持った堂々たる騎士〔農園主〕の面前では、はいとかいいえとかいうごく短い言葉を発するために口を開くだけでも、このうえなく生意気であると見なされる。(ウィルソン 249)

「古き良き南部」の調和を構成する上で必要な上流階級という要素は、非奴隷所有者を軽んじ、相対的に農園主の有閑階級としての名誉を強化するために利用されていたのである。

また、『風と共に去りぬ』における混血奴隷の不在という事実もまた、調和が農園主の名誉を守るために存在していたという主張の根拠になりうる。混血奴隷とは、白人の農園主と黒人の女性奴隷の間に生まれた子どもを指し、農園主の血を引きながらも彼らは奴隷とみなされた。この混血奴隷は、南部では一般的な存在であった。20年間の奴隷生活の後に北部に逃亡し、奴隷解放運動に従事するようになった混血奴隷、フレデリック・ダグラスや、女性奴隷が農園主から性的搾取を受ける様子を告発した『ある奴隷少女に起こった出来事』を記したハリエット・ジェイコブズの証言、また南部において混血がもたらす悲劇を描いた小説『デジレの赤ん坊』の著者ケイト・ショパンが、幼少期2人の混血奴隷と同居していた事実から見ても、南部にとって混血がありふれたものであったことが分かる(瀧野『混血の農園主』25)。しかし『風と共に去りぬ』においては、混血奴隷の存在はもちろん、女性奴隷と関係を持った農園主の男性さえも一切描かれていないのである。その理由として、農園主の高潔な紳士としての名誉の維持、ひいては「古き良き南部」の調和の維持が挙げられる。混血奴隷の存在は、農園主と女性奴隷の、性的関係が前提である。この関係は当然両者の同意によるものではなく、農園主の主人としての立場を利用した、女性奴隷への卑劣な性的関係の強要であった。これら史実の農園主たちの振舞いは、騎士道的な道徳を重んじる高潔な農園主の名誉とはかけ離れたものである。

また、農園主が女性奴隷と関係を持ち子どもを産ませるということは、自身の財産である奴隷を増やすことにもつながる。奴隷の頭数が増えるほど農園でのプランテーションでの作業効率は上昇し、農園主はさらに富を得るという構造ができあがる。決して公にはできない営みが、南部の奴隷制プランテーションの繁栄に一役買っていた。この事実は、『風と共に去りぬ』が描いた紳士的な農園主のイメージとはかけ離れたものである。実際、南部女性の日常を書き残したメアリー・チェスナット夫人も、義理の父親が女性奴隷との関係を赤裸々に語る様子を耳にしており、女性ばかりが「当時の典型的な美德を求められ、その行動も道徳規範に制約を受けてい」ながら、対して「白人男性は、黒人女性との婚外交渉や放蕩が黙認されている」ことに怒りをにじませている(瀧野『農園主と奴隷のアメリカ』111)。史実の南部プランテーション社会においては少なくとも、紳士的で高潔な農園主と夫に従属する貞淑な妻が織りなす、牧歌的な田園社会という構図の成立には無理があることが分かる。だからこそ、『風と共に去り

ぬ』において、農園主の紳士としての名誉を演出するには、この関係は伏せなければならなかった。史実において確実に存在したといわれる混血奴隷、それに伴う農園主と女性奴隷との性的関係を一切除外することによって、「古き良き南部」の調和の基礎である、高潔な農園主としての名誉を維持しようとしたのである。

また『風と共に去りぬ』においては、男性の名誉を保持しようと社会的な圧力が働くシーンが、混血奴隷の不在のほかにも存在する。スカーレットがアシュリと昔日の思い出を共有しようと友人として交わっていた抱擁を、スカーレットを嫌う女性インディア、エルシング夫人、元囚人の用心棒アーチャーに目撃されてしまった。南部上流市民はこの行為を不倫と断じたが、ここで主にやり玉にあげられ批判の対象にさらされるのはスカーレットのみであった。当然、この不倫疑惑が湧く前からスカーレットは起業や女同士の不仲によって、アシュリよりも世間からの評判は悪かったのだが、それを差し引いても侮辱や嘲笑は彼女に集中していた。「例によって、悪いのはぜんぶ女ということにして、男性側の罪には肩をすくめるだけ」（第5巻263）なのである。ここから「古き良き南部」において女性に付与された貞淑さという属性は、男性の名誉に劣るものであることが分かる。いくら名家の女性のふしだらさを強調することになっても、男性紳士としての名誉が破壊されるよりはましであると判断された。男性の名誉が守られるためであれば、多少理想の「サザン・ベル」像が崩れようと、「古き良き南部」の調和の維持には問題がないのである。

農園主たちがプランテーションの頂点としての名誉を維持することで得られるものは何か。妻や奴隷は彼らに従い、補佐するものという不文律が生まれることで、家庭内には農園主＞妻＞奴隷という明確な秩序が生まれ、表面上の調和が保たれやすくなる。また農園主に、妻や奴隷という無力な存在には寛大な保護者として振舞っているという、高潔な紳士としての名誉を付与することで、強固な家父長制や奴隷制を有する南部プランテーション制度の正当化にもつながる。1932年に出版された『スワローバーン—ヴァージニア滞在記』では、「快活で、寛大な心を持った」農園主メリウェザーが、家族と奴隷を甲斐甲斐しく世話する勤勉な妻と立派な邸宅で有閑な暮らしを送り、「満ち足りた雰囲気、明るい様子、家族的な結びつき」を感じられる奴隷たちが自由気ままな生活を営む様子が描かれている（瀧野『農園主と奴隷のアメリカ』89-91）。19世紀前半に差し掛かり、北部で奴隷制廃止運動が熱心に叫ばれるようになったアメリカ国内において、南部人は『スワローバーン』での心優しい農園主とその妻、そして奴隷との関係性を正確な描写であると考え、南部のあり方を「積極的善」（瀧野『農園主と奴隷のアメリカ』93）として肯定した。「古き良き南部」の調和は、農園主の高潔さと寛大さと広大な農地を経営するに足る知性を備えた唯一の存在であるという名誉を与え、家父長、奴隷主としての強権的な権力を付与することを正当化する道具として活用されていたのである。

『風と共に去りぬ』は、農園主の高潔な紳士としての名誉をなによりも重んじた「古き良き南部」の調和を礼賛した作品であった。第一章第一節でも述べた通り、本作では農園主は奴隷と良好な関係を築いている。また妻との関係性においても同様であり、農園主たちは「温情的権威義というイデオロギー」（ノートンほか 251）を通して、妻や奴隷への優越を正当化し、自身の名誉に繋げ、そこで得られる封建的な秩序のことを「古き良き南部」の調和と呼んだの

である。

結論

以上、『風と共に去りぬ』が、史実上の南部社会にも存在した「古き良き南部」の調和と名誉を守る女性と男性の、保守的な生き様を肯定的に描いていたことを証明した。

第一章では『風と共に去りぬ』における「古き良き南部」の調和の定義、そして調和を維持するため「サザン・ベル」に付与されたジェンダー観をそれぞれ論じた。第一節にて「古き良き南部」の調和の正体が、「上流階級」、「似た者同士」というアイデンティティに固執する南部人を肯定し合うことで得られる、同質性による安心感であることを明らかにした。そして第二節では、同質性を重んじる南部共同体の中で、家庭と社会の調和を守る「サザン・ベル」という女性ジェンダーが作りあげられたことを考察した。第二章では南部社会の頂点に立つ農園主が持つ名誉がどのようなものであったか、また「古き良き南部」の調和が誰のために作られたものであったかをそれぞれ論じた。第一節では、農園主の妻に対する保護と支配の姿勢から、彼らが家父長としての名誉を重んじていたこと、また女性起業家スカーレットへのバッシングから、一家の稼ぎ手、養い手としての名誉を重視していたことを分析した。そして第二節では『風と共に去りぬ』における混血奴隷の不在、または男性の名誉を守るように作用する南部の排他性から、「古き良き南部」の調和とは、農園主の名誉を守るために作られたことを論証した。

スカーレットは南部の前時代的な因習を脱し、絶えず変化する社会情勢を如才なさと柔軟性で乗り切る革新的な女性であった。彼女は敗戦後、過去は振り返らず前進あるのみと決意を固めて、起業や結婚など新しい人生に適応し続けた。彼女は、失われた戦前の豊かな暮らしをいつまでも引きずる南部の友人たちを理解できていなかった。しかし、娘の死という大きな痛みを経験したのち、スカーレットも心のよりどころを南部への郷愁に求めはじめる。スカーレットのような、変化した社会を生き抜く如才なさと柔軟性をそろえた女性であっても、南部の保守的な調和への愛情を捨てることはできなかった。母が伝える伝統に従っていればよかった少女時代から一転、家族を飢えから守るため、実社会をビジネスの手腕だけで戦い抜いた彼女は、何の憂いもなく娘時代を過ごした「古き良き南部」を、家父長による封建制度も含め懐かしく感じたのかもしれない。それは彼女が白人の、上流階級であったことも大いに関係していたであろう。ジェンダー観、人種の保守性は既得権益層の安心感と親和しやすい。「かつての自分たちは正しかった」と信じたい人々はスカーレットと同様、女性、奴隷のような弱者の存在を透明化し、家父長制と奴隷制を内包した南北戦争前の南部を、過ぎた美しい時代と称賛してしまうのである。

既得権益層の安心感のために、マイノリティが抑圧されていた時代を肯定する風潮は今なお存在する。それが人種であれジェンダーであれ、かつてのマジョリティは旧来の慣習を重んじ、そして差別の渦中にある人々も強者に迎合し、抑圧的な現状を肯定しようとする。BLM運動、フェミニズム活動が興隆する中、その風潮を受け入れられない人々は一度立ち止まり、自身の保守主義の根幹がどこにあるのかを分析するべきであろう。その自己批判こそが、マ

ジョリティだけでなく、すべての人間にとって「ギリシャ美術のように欠くところがない完成度と乱れない調和」を持つ社会の創造につながるのである。

引用文献

- 秋元英一『世界恐慌—1929年に何がおこったか』、講談社、2009年。
- アルトバック、E, H『アメリカ女性史』、新潮社、1979年。
- 石村健編『南北戦争の遺産』、田中啓史、堀真理子訳、本の友社、1997年。
- ウィルソン、エドモンド『愛国の血糊—南北戦争の記録とアメリカの精神』、中村紘一訳、研究者出版、1998年。
- 大井浩二『アメリカのジャンヌ・ダルクたち—南北戦争とジェンダー』、英宝社、2005年。
- 鴻巣友季子『100 de 名著—マーガレット・ミッチェル 風と共に去りぬ』、NHK 出版、2019年。
- 越智博美『モダニズムの南部的瞬間—アメリカ南部詩人と冷戦』、研究社、2012年。
- 後藤和彦『敗北と文学—アメリカ南部の場合』『文化交流研究—東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、東京大学文学部次世代人文学開発センター、31巻、2018年、pp. 37-48。
- 高橋正雄『アメリカ南部の作家たち』、南雲堂、1987年。
- 瀧野哲郎『農園主と奴隷のアメリカ』、世界思想社、2004年。
- 「混血の農園主—「デジレの赤ん坊」における秩序」『言語文化学研究 英米言語文化編』、大阪府立大学、13号、2018年、pp. 19-30。
- 田中きく代『南北戦争期の女性とその政治文化：研究の現状と展望』『人文論究』、関西学院大学人文学会、64巻、2015年、pp. 141-162。
- 谷中寿子『南北戦争とチェスナット夫人—新しい南部女性の登場』『史苑/立教大学史学会編』、立教大学史学会、36巻、1975年、pp. 39-56。
- ノートン、メアリー・ベスほか監修『アメリカの歴史 合衆国の発展』、白井洋子ほか訳、第2巻、三省堂、1996年。
- ミッチェル、マーガレット『風と共に去りぬ』、鴻巣友季子訳、新潮文庫、2015年、全5巻。

参考文献

- 青木富貴子『「風と共に去りぬ」のアメリカ』、岩波書店、1996年。
- コーエン、D、R、E、ニスベット『名誉と暴力—アメリカ南部の文化と心理』、石井敬子、結城雅樹訳、北大路書房、2009年。
- ノートン、メアリー・ベスほか監修『アメリカの歴史 大恐慌から超大国へ』、第5巻、上杉忍ほか訳、三省堂、1996年。

